

【一】次の文章を読み、設問に答えなさい。

社会からの疎外感や人生設計の困難に苦しんでいるのは、男子だけではない。A
移民第二世代の少女たちこそ、社会からの疎外と、家族とその文化からの圧力に苦しんできたのである。一九八九年に、パリ郊外の中学校に宗教スカーフを着用した三名の女子学生が登校し、校長が学校から追放するという事件が起こった。

(あ)禁止や抑圧にもかかわらず、少女たちがスカーフを着用しつづけた理由は、移民第二世代の少女たちのおかれた過酷な環境に求められなくてはならない。(い)宗教スカーフを着用して登校する女子学生と、それを禁止する学校との対立はその後十年以上くり返され、フランス社会全体を揺るがす大問題となった。(う)フランスでは一九〇五年の法律により、宗教と政治を分ける政教分離が国是として認められており、校長はこの法律を盾にとつて、国民を育成する公教育の場に宗教スカーフをもち込むことは許されないとして登校禁止を命じたのである。

彼女たちの親である移民の第一世代は、B退職しているか退職年齢に近づいて
いることもあり、その関心は第一に年金や社会保障に向かっている。社会から疎外され、疎外ゆえに故国との結びつきを重視してきたかれらの意識は、フランス社会には向かわず、生活の安定と家族の名誉のみを重視する傾向がある。彼らは自分の娘や姉妹の行動を監視し、夜遊びや男友達と連れ立っているようなことがあれば、暴力に訴えることも躊躇しないという。

彼女たちに対する両親や周囲の圧力の強さは、個人主義と自由を尊重するフランスで教育を受け、フランス市民として育ってきた彼女たちの過半数が、今日もなお(*)マグレブ生まれの青年と結婚させられているという数字に示されている。彼女たちのあいだでは自殺や精神疾患を病む割合が異常に高いことが報告されているが、C彼女たちは精神的な圧迫のもとにおかれてきたのである。

(*) マグレブ・・・北アフリカ西部に位置する地域の名称。モロッコなど。

(竹沢尚一郎『社会とは何か』による)

一、文中から次の文章が抜けている。この文章の入る場所はどこか。この文章の入る直後の文章の最初の五文字を抜き書きしなさい。ただし、句読点は文字数に含まない。

その結果が、女子に対する圧力としてあらわれるのである。

二、本文第二段落では、文章の順番を変えてある。解答欄に、「あ↓い↓う」のように、正しい順番を記入しなさい。

三、文中の空欄部AからCに入るもっとも適切な語はどれか。次の語群の中から選び、記号で答えなさい。

（語群）

- | | | | |
|--------|------|--------|----------|
| ①したがって | ②逆に | ③それほど | ④それにもなつて |
| ⑤というより | ⑥すでに | ⑦ほかならぬ | ⑧遺憾ながら |

【二】次の文章を読み、設問に答えなさい。

ここ数十年や数百年程度の話ではなく、千年あるいは二千年のタイムスパンで世界全体の経済成長を眺めてやろうという壮大なプロジェクトを展開している世界的な学者グループがあります。プロジェクトを開始したのはアンガス・マディソンという経済学者ですが、そのマディソンらが描き出した世界史観は、経済は成長するものだというシナリオに慣れ切った私たちには、ちよつとした驚きですらあります。紀元一世紀つまり東の漢と西のローマ時代から一九世紀初頭までの一八〇〇年間、一人当たりの所得でみた世界経済はほとんど成長していないことが示されているからです。それは新世界アメリカが加わった一六世紀以降をみても同じです。

マディソンらが描き出した結果は、経済の成長というものは意外なほど新しい現象で、長い人類史を通じてみると経済というものは変動こそすれ、基本的には成長をしない時代の方が A 長かったということを示しています。中世の世界とは基本的にゼロ成長の時代だったわけです。人々が豊かになるという意味で、世界が、とりわけ西ヨーロッパ世界が成長の時代に入るのは、早く見積もっても一八世紀の終わり、手堅く見積もれば一九世紀の初めごろからなのです。

そう思ってみれば、利子に関する中世カトリック教会の態度にもあまり違和感を覚えなくなるのではないでしょうか。彼らが禁止していたのは、利子を取ることの全部ではなく、ホウガイな「高利」である「ウスリア」を取ることでしたが、それはゼロ成長の時代としては自然な感覚と言っても良さそうだからです。ゼロ成長の時代には「現在財と将来財の価格差」など、 B 存在しなかったはずでした。したがって、もし当時の世界に現代の資本市場に相当する取引の場が存在していたとしても、それで成立する現在財と将来財との相対価格つまり自然利子率は、基本的にゼロを中心に上下するだけだったでしょう。もちろん、借り手の信用度に応じて付くはずのリスク・プレミアム相当部分であるインテレッセは別です。

ところが、そのカトリック教会も、中世も終わり頃になると教義を徐々に転換し、時代

が一九世紀に移るころには利子を公に認めるようになります。この転換の時期は、西ヨーロッパ世界が成長へとギアを入れ替えた時期と一致しています。利子が認められたので経済が成長できるようになったのか、成長するようになったので利子を認めたのか、そんなことを言いたくなる転換なのですが、その議論をしても C 意味はないでしょう。ルネサンスと宗教改革そして絶対主義国家の成立と続いた変化の中で、このころになると人々の精神は教会が認めるかどうかをあまり気にしなくなっていたはずだからです。いずれにしても、経済が成長の時代に移るころには、利子は罪悪から常識に変わっていたのです。

（岩村充 『貨幣進化論』による）

一、文中から次の文章が抜けている。この文章の入る直前の文章の最後の五文字を抜き書きしなさい。ただし、句読点は文字数に数えない。

でも、この部分を除いた利子がゼロであるべきとされるのは、時代環境からみればナンセンスなことではないのです。

二、文中の空欄部AからCに入るもつとも適切な語を次の語群の中から選び、記号で答えなさい。

- (a) すぐに (b) 多少は (c) あまり (d) 大部分は (e) ほとんど
- (f) 決して (g) はるかに (h) ゆえに (i) しかしながら

三、本文によると、中世カトリック教会は、基本的に「利子」というものを認めていなかったが、しかし借り手の信用度に応じて付く利子は認めていたとのことである。この利子のことを何というか。

【三】傍線部の漢字の読みを示しなさい。

- ①汚泥に住む微生物を調べる。
- ②近代美術の白眉と言われる作品。
- ③あいまいな対応に業を煮やした。
- ④汎用性の高い素材を購入する。
- ⑤組織の病弊が明らかになる。

【四】傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 鬼が出るか、ジャが出るか。

② ライトが強い光をハナっている。

③ 清流のミナモトを探しあてて。

④ 古新聞をタバねて運ぶ。

⑤ ヒメが異国の王子と結婚する。